

平家為海 卷之三十一

U 5  
2004  
13



門 415  
號 2004  
港



長門本卷十三

信濃國筑磨河合戰附城太郎敗北事

諸寺諸社新化事

大掌會延引乃事

法皇日言御事附騷動事

奉幣使を下り事

清水冠者人質とて鎌倉に趣く事

平家軍兵發向の事

本家上軍兵火打城を攻落す事

木曾此勢加賀國を追落し事

木曾相林  
藏書之章

廣辻氏  
藏書記

木曾義仲山陣并神願寺事  
砥波山合戦平家敗北の事

平家物語卷十三  
信濃國筑磨河合戦 附 城太郎敗北の事  
六月三日 法皇園城寺ニ御幸あり 山科寺に金堂被造  
始行事 辨官ふとくしはる 魚丸 由 瀬 川 下り  
去二月廿五日 城四郎長茂當國廿七郡出羽を催て敵  
此勢此のさを此母んと雜人すくすにかりつめて六万  
余騎とすなり たり 信濃國(出)んと此出たちける  
先業有限の十を中(多)んとすといてうちた川  
六万余騎を三万小ふて筑摩越に比濱小乗太伴  
太郎大將軍にて一万余騎をいへる(つ)らへ

平家物語卷十三  
信濃國筑磨河合戦 附 城太郎敗北の事  
六月三日 法皇園城寺ニ御幸あり 山科寺に金堂被造  
始行事 辨官ふとくしはる 魚丸 由 瀬 川 下り  
去二月廿五日 城四郎長茂當國廿七郡出羽を催て敵  
此勢此のさを此母んと雜人すくすにかりつめて六万  
余騎とすなり たり 信濃國(出)んと此出たちける  
先業有限の十を中(多)んとすといてうちた川  
六万余騎を三万小ふて筑摩越に比濱小乗太伴  
太郎大將軍にて一万余騎をいへる(つ)らへ

植田越に津張庄司大夫家親一万余騎を以て  
川口より大子に於城四部長茂大將軍にて四  
万余騎勢を引具して越後國府小善なり  
明日志ふ此の出入りより衆に於陣半より誰  
地盤原平吾其甥也御富郡三郡不吾六部風聞  
橋本家子三河次郎治谷三郎いさく此太部將軍三  
郎郎木に吉津釜邊坊其子平親大夫奥山權九守  
子息新大夫坂東別當里外當流りて年  
け此の城四部よりおせし路といつれり河  
終にすくく四方余勢を引具して志なる國

中載て筑前河横田の庄小陣を取城に御はつれ  
此れをのて剛より木曾を云ととと中より木  
曾をを削て兵を三つらに志なる上野兩國より  
せ衆るとして糸巻の勢千騎に過りり多當國  
此河内島河原小陣を以て楠六郎ト名を親忠い  
と馬を給りつて横田河原をとお向いて城四部  
勢ひて衆らんとせやれる此美志なる處として親忠  
をいりて親忠比りつてはよりねとて白鳥河  
原をお出て塩尻さぬ河に在りて二段せし城  
四部方横田志此の石河さぬ火をうけて焼

親志是を以て大宝堂より名告て馬より下りて四男  
以て八幡宮を拜して南無阿弥陀仏八幡大菩薩  
此令戦ふ木曾殿おちぬる十六人ハ七女禰子男  
同しく神領を名進しく女らんとを祈り申す親  
志改桑しして志うくと申すは八幡宮のせぬ  
所見おとてや若共とを引けりてあやせて夜の曙ハ  
本堂にこそせけり願書を八幡に納めし、則ち三  
のふ、濃下、市、批井、五部、信濃に木角六部佐竹  
七部、根津、以部、海登、大平、四部、小室、太部、中月、八  
部、同三部、志賀、七部、同八部、根井、太部、同改部、登次  
太部、本、次、部、千、登、太、部、源、次、部、吾、塚、り、満、  
子、塚、太、部、登、年、い、け、り、木、曾、八、人、の、恨、を、お、こ、し  
として申すは、此の部、お、こ、し、之、を、具、す、是、を、ん  
む、福、の、者、共、の、け、し、と、申、す、い、ま、は、け、る、此、を、い、ひ、お、こ、し、  
として、下、路、此、部、を、申、す、を、並、て、七、部、友、此、を、り  
り、けて、更、に、三、部、友、い、け、り、い、ぬ、百、ア、友、此、部、小、梓、濃  
小、原、太、重、元、主、の、款、を、ら、か、く、お、こ、し、う、て、や、し、お、こ、し、を、  
時、佐、井、七、部、り、家、の、子、部、小、三、七、部、お、の、い、て、く、重、元  
二、此、を、を、む、す、い、合、せ、お、こ、し、を、馬、に、い、た、と、申、す、  
太、刀、を、ぬ、れ、中、に、せ、入、て、さ、ん、と、最、い、切、お、こ、し、

けらと胡人の虎より博多王の鬼物と畏おぼはるる  
敵共廿余騎討たて後(さ)と出にたりおひつらるるの  
社よりけ礼其時重光中よりと敵も味方と出た  
勢より終に此より死身なる程と主の佐する程やと  
太刀光を口と合てたより因に貴化て死する程  
をみて情すぬ者も終にけ礼木曾是をみて  
表れざる程の者も終にけ礼と一万余騎の敵  
成より面を向てすすしと北に宣ひける城四部と  
勢より化共皆かり武者も手懸は者たり木曾  
の僅の母勢も化共<sup>四部</sup>の程と源氏の末業或は年比  
は思ひ附たる部も化と一味同に入つて戦ひり  
信濃源氏に井上九郎光盛とて終にけ礼の  
兵七あり内木曾に中りると大にけ礼において  
但せむしからの身に在てと光盛に但せむしと  
向いつをさしたりけ礼は本堂前にも俄に赤毛  
を化して有珍なつて保科堂三郎宗清を引  
くしてけける木曾も見をみてけ礼も二をぶして  
向化とけ礼もとまひたれと光盛一法の中より  
ちくまぬをせとつとけ敵此陣を南か北か  
しけの通り又引くして南か北か城四部

十文字にけりしはたの社口懐り人今度の義い  
りつらんすむと何やして竺原平兵を扱てい  
けりしとせいにすく至るはたるあは口懐り礼  
あふすあといひり礼と竺原平兵中より頼直  
今年廿に成りいぬ大小事うのせんに廿六度何  
いぬ礼よりあうはすあをうけて刃糸に入ら  
んとす百騎中此勢をお具して河をさすとやじ  
て名入りける竺原國此人と知音多くいしてけんさん  
せぬとすくふし他國此殿原と音にらねつ  
らん竺原頼直と名かきまやうあれて木曾殿

此糸に入るといふよりてかけすはる是を聞て上所  
乃國に高山此人と竺原の斗りうけ出て竺原勢此  
中へけ入て敵くし戦りる両方兵目をもす  
志けりあつて東西と引てたれたにりる  
高山と竺原勢の勢と廿糸流に責あされ竺  
原と竺原の勢ハ廿七流と付れてあつて廿七流に  
ありし危大將軍のあにのけ富に成て馬より下  
て合戦此槍いし以後せしれつる勢とせは  
城口部是をかへておのの言谷今うと始ぬるそ  
の中いゆる人のと嘆息いしもの物表といを化

受りしすまの詞をいらすしけし社ありいたん  
木當り方にとり山七者とあぐくくんとてあすか  
らぬ事と思いて所の取し佐井七部五十余路のほ  
ちくまのをうけつゝいひおとす此後には望の甲  
比て紅のほけ子て志す所しけり馬よりよく  
あんの鞍を置てけりたり是をて城の四部  
方より返社三部十三路も向しを出たり馬路未草  
威の後にははうし打る富の流をておれをとりけ  
せりより連絡ありけあり馬に令あふりんの鞍を  
置て替乗たりりる互にうまよく合せて信濃の國

此位へ言ふ三部家俊と名乗るを佐井七部といは  
らすてはては君と弘資にいはぬ教ふらんか  
化則たるらん者を美平の御門をけりて名をわけ  
し猿蓑太夫の代り来上野國の住人佐井七部  
弘資と名乗りけしと富部三部取の一人我身ハ  
次ふかふとんと思ひけり家俊の志ををり物と  
あつてたらしきとよむ化をの言んして向らと  
富部三部いひ程れ者かれと横田の軍に佐井七  
部に増化て名りうさして有る物と人のいもんと  
名乗おしよきと悦ぶけ鳥羽院の上北面にい



下野守大夫正弘嫡子左衛門大夫家弘と相傳え  
此合戦の時新院の方には是合戦仕りたりしを時  
に奥の流されてを子に富子家俊とて源  
平の末代に升しり死しハす汝をみて死したる礼  
正家平の詞書といひゆきて十三騎のつとみ  
をみりて佐井の早奈端の中をうけ破りて後つと  
ぬけて又取て返してたてまやりにせんくはる佐  
井七郎面りや千戦いり佐井十三騎ハ十三騎小女  
ふし礼にり富部の十三騎ハ四騎ある佐井と敵を  
戦ておを引いんと死れむすといひて退るる富  
子とてハ礼し詞書を安きす思ひて佐井と富子ハお  
詞をうけてちよとらよとにありむきてちやんと志  
たれよ家の子部おとるたてし志れハちやり  
り両方いしめたて戦ふ程あはしりしの舞しり  
計よりカみしとらして大將軍と引えりあり志ら  
たりり富子部軍にりつとれたるくちよをな  
負たりけ礼と佐井七郎は首をこりれにり佐井  
此ををさうさふしして富子部をたけ計た礼を  
て引過る富子部の部おに梓濃源を重光といふ  
死生不知の兵あり此程主に部おせられて越後守

乃佐もせりける此度城番にありおすを化しよ  
のうん款一騎者きて部内山にれんとていいてい  
たりける軍有と聞ていきた地来り返りあつづく  
にせといひ礼ハ何せ此に唯今佐井七郎と戦ひつ  
るあま礼よし教つた礼ハ<sup>鞭</sup>を向けておのいて地今  
みれ、款も味方と死外で舞うと付れてみよ我  
主の馬物具とてとをみよと地よりて上野の佐井  
七郎とと此を兼ねるア岐部小原を重光と  
中者也軍より先よ此使に居て軍に在つれてい  
せやよ此返る中且ハ主君の山向をとも今一度みよら

せもやして番りたりりして終りたる此首にむひを  
りて此返事やさんといひた礼ハ先よ此中のに叶し  
あひいて鞭を向けて近る重光つるめつたす佐井七  
郎ハ其身も馬の弱なりあ及先立たり礼も  
五六及の中追つので地あつて引んてまよと首  
たり重光ハ剛者大力の割の者にてるたれ佐井  
七郎も力ておき、首をかみりさすたれ  
り重光ハ款の老所ハ我主のそのけらるを切あ  
して、款のそにありて置てあつてまよと重光  
あせ系りて一人のさんけんよつて、あつちあつち

光を動かさずして人つと共闘めあをせしむらん  
すんぬたう人つと共闘めあをせしむらん  
事口懐といひ今度の軍によれ款討ちて此御  
をゆるさしむんと社といつゝあかき衆を  
社といふは礼を光めていすつゝ礼をて後にあか  
討ちぬつたふほく衆りて討ちぬかひたあか  
口懐は礼を光めていすつゝ礼をて後にあか  
ていれ志すの山をいふく越す魂のぬくと申て二  
そをたう右のふとすつて款も味すは是をて  
佐井曰此はやく共く遠く申すはき者と申説せら

礼の。唯今も山説くといつて筑前河のをもいふ  
せれて城四部、後陣、城向山中をせたる木當り知  
はら井上もやけ出たりわ、めてわいしをて、義仲  
わいし合てけせすと一騎もあかきあま業も  
とて書此緒をよてすの氣に城四部と井上赤  
木を二階で搦手につゝあかき衆破莊司宗親  
城をとりぬかたはあかき衆をてて筑前河を  
いをたてて知する氣に空闘すつて筑前河を  
たつとつゝあかき衆をてて筑前河を  
大なる城なり度廿一丈斗り也光盛すつて

けて堀を平すせう(七)をいよひ渡り續ひて  
渡る者有堀の底に落ちる者あり光盛(六)をて  
礼(六)未(六)も(六)う(六)ふ(六)り(六)控(六)ひ(六)を(六)さ(六)し(六)向(六)けて(六)中(六)馬(六)を  
伴(六)入(六)る(六)頼(六)義(六)全(六)才(六)お(六)と(六)の(六)三(六)部(六)を(六)遠(六)く(六)子(六)自(六)隱(六)岐  
守(六)光(六)明(六)孫(六)阿(六)比(六)呂(六)の(六)命(六)長(六)光(六)の(六)末(六)景(六)信(六)濃(六)國(六)住(六)人  
井(六)上(六)九(六)郎(六)光(六)盛(六)敵(六)を(六)と(六)か(六)り(六)し(六)た(六)を(六)り(六)礼(六)と(六)て(六)三  
百(六)余(六)騎(六)の(六)衆(六)を(六)並(六)へ(六)て(六)北(六)より(六)南(六)へ(六)け(六)通(六)る(六)大(六)手  
木(六)曾(六)二(六)千(六)余(六)騎(六)に(六)て(六)南(六)より(六)北(六)へ(六)け(六)通(六)る(六)か(六)し(六)め(六)手  
と(六)大(六)手(六)取(六)て(六)返(六)し(六)七(六)より(六)八(六)より(六)け(六)け(六)れ(六)ハ  
城(六)四(六)部(六)大(六)勢(六)四(六)方(六)へ(六)け(六)散(六)ら(六)れ(六)て(六)む(六)あ(六)た(六)ち(六)に(六)か

け(六)ち(六)り(六)礼(六)て(六)三(六)途(六)者(六)を(六)討(六)礼(六)に(六)り(六)逐(六)る(六)者(六)ハ(六)大(六)手  
河(六)を(六)を(六)せ(六)道(六)也(六)馬(六)も(六)人(六)も(六)水(六)に(六)お(六)は(六)れ(六)て(六)死(六)る(六)り  
大(六)将(六)軍(六)城(六)四(六)部(六)笠(六)原(六)平(六)丑(六)返(六)し(六)合(六)て(六)戦(六)ひ(六)る(六)長(六)茂(六)ハ  
あ(六)ら(六)り(六)て(六)越(六)は(六)し(六)返(六)し(六)河(六)上(六)流(六)る(六)馬(六)や(六)人(六)ハ(六)く  
か(六)り(六)り(六)落(六)る(六)人(六)より(六)先(六)に(六)落(六)し(六)流(六)れ(六)出(六)笠(六)原(六)平(六)太(六)山  
に(六)う(六)り(六)て(六)か(六)い(六)か(六)れ(六)命(六)ま(六)て(六)中(六)馬(六)に(六)世(六)し(六)生(六)し(六)子(六)孫(六)に  
に(六)傳(六)へ(六)て(六)頼(六)む(六)し(六)れ(六)哉(六)後(六)武(六)者(六)ハ(六)古(六)人(六)也(六)今(六)度(六)の  
大(六)勢(六)に(六)て(六)ハ(六)木(六)曾(六)を(六)ハ(六)生(六)捕(六)り(六)志(六)つ(六)ら(六)り(六)つ(六)る(六)り(六)の  
を(六)逐(六)ぬ(六)る(六)事(六)社(六)運(六)比(六)極(六)る(六)礼(六)と(六)て(六)出(六)羽(六)の(六)國(六)へ(六)來(六)来  
に(六)ら(六)木(六)曾(六)横(六)田(六)の(六)運(六)に(六)切(六)ら(六)る(六)處(六)の(六)首(六)上(六)平(六)景(六)人

也郡城部跡に於て越後國府に及ばれ八國  
七者其<sup>共</sup>なる源氏に従ひける城部安堵し  
し加りけり八會部<sup>共</sup>の爲にけり北陸道七國の兵  
皆<sup>共</sup>本軍に付て従ふ事雖<sup>共</sup>と越後の國に  
稻津<sup>共</sup>新女系<sup>共</sup>太正<sup>共</sup>家<sup>共</sup>長<sup>共</sup>吏<sup>共</sup>東<sup>共</sup>明<sup>共</sup>威<sup>共</sup>儀<sup>共</sup>師  
加賀國に林<sup>共</sup>夏<sup>共</sup>楳<sup>共</sup>井<sup>共</sup>上<sup>共</sup>波<sup>共</sup>熊<sup>共</sup>能<sup>共</sup>冬<sup>共</sup>國<sup>共</sup>に土<sup>共</sup>田<sup>共</sup>の<sup>共</sup>若  
とも越中國に野<sup>共</sup>尻<sup>共</sup>屋<sup>共</sup>宮<sup>共</sup>津<sup>共</sup>佐<sup>共</sup>美<sup>共</sup>太<sup>共</sup>都<sup>共</sup>木<sup>共</sup>是<sup>共</sup>木  
互に牒<sup>共</sup>帖<sup>共</sup>を<sup>共</sup>遣<sup>共</sup>して中<sup>共</sup>若<sup>共</sup>木<sup>共</sup>若<sup>共</sup>及<sup>共</sup>に城<sup>共</sup>部  
亦<sup>共</sup>若<sup>共</sup>して越後國府に及て責<sup>共</sup>上<sup>共</sup>て是<sup>共</sup>を<sup>共</sup>化<sup>共</sup>し  
守<sup>共</sup>也<sup>共</sup>志<sup>共</sup>河<sup>共</sup>の<sup>共</sup>統<sup>共</sup>しての<sup>共</sup>は<sup>共</sup>礼<sup>共</sup>ぬ<sup>共</sup>先<sup>共</sup>小<sup>共</sup>衆<sup>共</sup>ら<sup>共</sup>ん<sup>共</sup>と<sup>共</sup>ひ<sup>共</sup>り<sup>共</sup>礼  
と<sup>共</sup>志<sup>共</sup>河<sup>共</sup>の<sup>共</sup>統<sup>共</sup>しての<sup>共</sup>は<sup>共</sup>礼<sup>共</sup>ぬ<sup>共</sup>先<sup>共</sup>小<sup>共</sup>衆<sup>共</sup>ら<sup>共</sup>ん<sup>共</sup>と<sup>共</sup>ひ<sup>共</sup>り<sup>共</sup>礼  
信濃馬<sup>共</sup>一<sup>共</sup>足<sup>共</sup>て<sup>共</sup>其<sup>共</sup>の<sup>共</sup>り<sup>共</sup>たり<sup>共</sup>け<sup>共</sup>り<sup>共</sup>て<sup>共</sup>社<sup>共</sup>五<sup>共</sup>万<sup>共</sup>衆<sup>共</sup>踏<sup>共</sup>に<sup>共</sup>成<sup>共</sup>に  
け<sup>共</sup>れ<sup>共</sup>定<sup>共</sup>る<sup>共</sup>亦<sup>共</sup>家<sup>共</sup>の<sup>共</sup>計<sup>共</sup>子<sup>共</sup>り<sup>共</sup>ら<sup>共</sup>れ<sup>共</sup>す<sup>共</sup>人<sup>共</sup>衆<sup>共</sup>を<sup>共</sup>た<sup>共</sup>越<sup>共</sup>後<sup>共</sup>の<sup>共</sup>  
國<sup>共</sup>北<sup>共</sup>城<sup>共</sup>を<sup>共</sup>出<sup>共</sup>し<sup>共</sup>り<sup>共</sup>て<sup>共</sup>其<sup>共</sup>を<sup>共</sup>統<sup>共</sup>して<sup>共</sup>置<sup>共</sup>て<sup>共</sup>我<sup>共</sup>身<sup>共</sup>の<sup>共</sup>  
信<sup>共</sup>濃<sup>共</sup>の<sup>共</sup>攻<sup>共</sup>り<sup>共</sup>て<sup>共</sup>横<sup>共</sup>田<sup>共</sup>の<sup>共</sup>城<sup>共</sup>を<sup>共</sup>其<sup>共</sup>任<sup>共</sup>し<sup>共</sup>け<sup>共</sup>り

諸寺諸社祈此事

八月十日改元ありて養和元年と改めける八月三日統  
後ち貞徳鎮西一向十太宰の貢大藏権亮謀及此  
事<sup>共</sup>の<sup>共</sup>り<sup>共</sup>より<sup>共</sup>て<sup>共</sup>追<sup>共</sup>討<sup>共</sup>也<sup>共</sup>九<sup>共</sup>日<sup>共</sup>官<sup>共</sup>廡<sup>共</sup>にて<sup>共</sup>太<sup>共</sup>仁<sup>共</sup>王<sup>共</sup>會<sup>共</sup>は<sup>共</sup>り<sup>共</sup>  
兼<sup>共</sup>平<sup>共</sup>將<sup>共</sup>門<sup>共</sup>の<sup>共</sup>乱<sup>共</sup>逆<sup>共</sup>し<sup>共</sup>時<sup>共</sup>府<sup>共</sup>主<sup>共</sup>奉<sup>共</sup>にて<sup>共</sup>是<sup>共</sup>を<sup>共</sup>被<sup>共</sup>引<sup>共</sup>例<sup>共</sup>と<sup>共</sup>爲<sup>共</sup>

率一其時朝綱の宰相北額文を書て志す  
向と率一今度さういふ率一す廿五日陰目  
に城四部長茂の國を以て同見城太郎資長去月  
廿五日他界は間長茂任國す奥の住人藤原秀衡彼  
國守小はに兩國共に以頼朝義仲を為追討也と也  
開中書にに此載たり此後國の本を押して  
長茂を追おとす上六國務にり及ハナリり廿六日中宮  
亮通盛繼登守教院以下北國へ下向す本當義仲  
を追討の事と城四部長茂の追討たれと極す  
遣す官兵九月九日越後國小して源氏と合戦十  
平家終ふおひあさ礼にけりわりの礼は廿八日左馬助の  
盛茂守忠度軍兵救千流を平して越後玉(要殺)向  
十兵革比御素一方ふるんすは北額を三らに  
諸社に神祇宮坊らに神祇官人諸社の宮司本宮未  
社まで各祈り居きり院より向らる諸寺諸社を  
僧侶諸社を調伏してはて天台王明雲儒正の攝政  
友乃山ささる根本中堂にりて七佛茶師の法を以て  
蘭城寺に圓惠法親王新宰相茶通に寺りて金堂  
にて北斗星王法を以て仁和寺守覺法親王に九条  
大納言有孝の寺りにて弘法法を以て此外諸僧勅定を

奉りて不動大元如意輪法善賢延命大熾盛光法  
至 逆造各肝膽を碎きて以れり院御所にて五檀法を  
行礼中乃人の大阿闍梨を房光前大僧正降三世此  
檀高雲權信正軍太利は受奉權大僧部正大威徳は云憲  
大僧正金剛夜又朝憲僧正亦面小拙忠勒丹精をい  
たして以る逆臣いて不亡と世人中より又吉社を  
謀及此等調伏のいの共人の法を三七日始行くと神  
七日の才五日の初日を降三世の大阿闍梨光法印大  
行事此彼岸氣を瘴死に死り神明三室より納受か  
と云事既歎也又朝敵追討の遺臣を奉りて大元法を以

ハ化らる安祥寺の實藏阿闍梨山卷教を進したりける  
を披發のりる事小平家追討のより注をくたりける  
小普沙より礼子印を尋らる瘴に中なる朝敵を  
調伏の由宣下せらる當時の軀を云系平家遺教  
とハ云たれ何平家を調伏すといふことありき也  
持中ける事此事を横りて此僧流罪にや行ひた尼  
いふ事く犯とせしむるん共大小事志割にて何とるく  
やみぬ太程小平家亡て源氏此世と成る源氏大小  
威して子印を奉り法皇御小由感有て其勅書小  
權伴師にあし礼ける又去上りの神祇友を神御食

例幣を世一社に走ら九十四日鐵の山甲冑を神宮へ  
奉りて昔天慶小將門を追討の山初に疾の甲冑を奉り  
祀たる。去嘉應元年三月廿日此令上九時焼く  
今度も其例とせ聞へくは使ハ神祇權少副大中臣定  
隆是をつとむ文察主の因く下向は同十七日任執  
宮院に下着す申の時斗り小天井か一天四寸をより  
くちふと落掛りて定隆の左の袖の中へ入にり怪  
敷と云いて袖をふりつけに其二つに座を台て上れ  
衣をぬいて懐をみれと又一尺不忌飯かかして而て  
座みぬおき人々中へ奇合て酒をせみけり何と

かく日暮にり扱る夜の其時斗り小定隆夜入か  
ろ苦くけよめりくは文察主いふととおと路  
くは去程の既息のくみりくは筑地より外小加  
き出たり礼の定隆以て死より文九条主忌小  
かりの去程の申候此申候事乃うけたり礼と大宮  
司祐成よりいふ友侍徒位下有儀以下をきく  
次寺小祭りの成より此外臨時の友幣を立て源  
氏追討の山初有るに定<sup>宣</sup>命に雷電神を世六  
六里をひらき況や源<sup>頼</sup>朝奉國を駐合す(一)や  
書へりるを源氏頼とせ出たり宣命乃外



記をく古例あり然と書ゆやすいさし出れとの  
悉失措也頼乃字の資といふる源をたすくと  
加れり僧も俗も各家此方人たる者も忽ち此  
けり此等の中より礼し礼と神明も三宮も此細受  
かるといふも揚馬也

### 大嘗會延引此事

十月今年涼宮に成るる大嘗會又初はす大嘗  
會の天武天皇此の時より始れり七月に前中御孫  
凡の其子の内小御孫を奉りて去るに遷都して  
有るるに新都にて叶くともありとれとさあはる此語

定有りて此節斗を形の如く初は終るは今も又  
涼宮をいれし内たあり及はす大嘗會延引の例の平城  
天皇此の時大同二年山禊有て十月に大嘗會あり  
ありてくを兵うち此同二年十月山禊有て十月の  
年此の時嵯峨天皇此の時大同二年大嘗會ありける  
を平城宮を徙りて小よて延引して次の弘仁元  
年十月山禊ありける朱雀院の時より兼平元年  
七月十九日宇多院失れせ給くは此いかり三葉  
院の山宮寛弘八年十月廿四日冷泉院此事小よて初  
花次第の弘長和元二年の初なる次の弘長元年

とありといふも一子に延引の所をいふの事及す去年  
新納して其意が御しおれ力及ん大なる有豊樂院  
ハナシ此出に三茶院の山時の所を記して大政官  
願にていなる庵よりつる天下涼宮の成なる上となく  
此<sup>子</sup>御に及す一子に及す此いぬる事いづる庵に事や  
らんといふやとミヤル十二月三日皇嘉門院矢由  
せぬいぬ山子六十是ハ法性寺の禪定及下の山は  
宗徳院の后院横枝つるつと礼すといふ時の山は  
いづるやらんといふやと衣化もいふ限りの事  
にてつたといふれぬ化をやりてい出家をいふ向後生不  
たひと山宮より外ハ他事おんといふりこれと院の山宮  
提し資あり我身つみの山得るも疑なく志すといひ  
て時をおほし山坊りして宗徳の山有後日出度佛お  
に吳安あり山善知識にハ大原来迎院此東城坊港  
敬と山廟といふ昔の山谷砂といふ所らせりいたりつるとお  
ほして衣化也同六見成の刻斗りお座主覺性法親  
王矣らせぬいぬ是と鳥羽院此山七宮といふらせ給  
いぬと山十八と山廟といふ廿三山院山廟といふら  
公郷十人殿上人甲人供奉しをりてうらハといふ  
いふと山有るものとていふらせぬいぬ法性寺後山處を

六月らて平家<sup>の</sup>堂の侍に化れり女院方より並奉ら  
せて言さぬ<sup>を</sup>を渡らせり<sup>なり</sup>

養和二年壬寅改元なり壽永元年と号す正月二日涼  
害に依り節會も消れす十六日踏歌の節會も亦く  
當帝忌月たるよを被る云々

法皇日吉、御幸<sup>所</sup>騷動此事

二月廿三日太白犯昴星<sup>の</sup>注変ありとて文要録  
云太白犯昴星大將<sup>の</sup>軍失國<sup>の</sup>又云夷来有兵起を  
二り四月十四日前權少僧<sup>の</sup>顯真貴賤上下を進て日吉  
社<sup>を</sup>如法妙法花經一萬部轉讀<sup>の</sup>事有けり法

皇御結縁れたたの御幸成たりける程<sup>の</sup>伯耆<sup>の</sup>いひ世  
たりけりや山門は<sup>の</sup>大衆法皇を取きりて平家を討ん  
とすりと<sup>の</sup>平家の人<sup>の</sup>あり合て六<sup>を</sup>、  
此<sup>の</sup>京中<sup>の</sup>貴賤<sup>の</sup>あり軍兵内裡<sup>に</sup>もせ集  
て四方の陣を<sup>の</sup>本三位中將重衡<sup>の</sup>大将  
軍として二十<sup>の</sup>法<sup>の</sup>官<sup>を</sup>お具して日吉の社<sup>に</sup>衆  
向<sup>て</sup>山上<sup>に</sup>又<sup>も</sup>源氏<sup>と</sup>力<sup>を</sup>して北<sup>に</sup>玉<sup>の</sup>あり  
平家<sup>の</sup>礼<sup>を</sup>山門<sup>に</sup>追討<sup>の</sup>ために軍兵<sup>を</sup>東坂  
本<sup>に</sup>よせると<sup>の</sup>大衆<sup>を</sup>りて大宮<sup>に</sup>樓<sup>を</sup>素  
に三塔<sup>を</sup>合<sup>す</sup>わ<sup>り</sup>、山上洛陽<sup>に</sup>騷動<sup>の</sup>事<sup>を</sup>斜

ありし法皇大少駁馬のせかひし中しそ供奉公卿  
殿上人を夫より北面七輩の中にも黄水を吐きり  
りり此上を益也とて急た還御也次重のらの令  
穴穂邊よりむつ取中りて攻たり誠より大衆平家を  
責んといふ事とかし平家又山川を追討せんと云  
事も化し何れも詠事とも此事共也是偏天物の飛  
為也此諸縁も亦し後しつかく此み攻りし山嶺も今  
れ心し何すすゝれやんとと云はるる

奉幣使を下さる事

二月廿四の臨時に廿二社の奉幣使を三らの川謹疾  
疫によりて也九月四日右大将宗盛大納言に遂任し  
て十月三日内大臣に成り大納言に上藤五人は超に  
た中より後徳大寺左大将實定一は内納言を花  
族英雄也学優長にて此是すする大将の時といひ今  
度といひ二度すす出えられぬいゝ社をいじんぬゝ  
と七日兵杖をありぬ十二日賀中りた當家此公令  
十二人扈從藏人以下殿上人十二人ありて我おとす  
と西より小まいらぬれぬいゝふめてたまふぬゝを誓有る  
東國北國の源氏もあはしく小まふりゆいて唯今世め  
此ありんとする小治のたら風のありやんも志すれす

花下のあり事此所有といひる花かきてくく花  
中のあり事とて此れと世の中と極難なる南都  
北都の大衆四國九玉の住人惣て金峯山の僧徒伊勢  
大神宮此神官宮人小至るまで悉く家をおきて源  
氏小心をのよむす四方に宣旨を下し徳和院宣を下  
さるるといふ宣旨も院宣も皆平家の下知と此所  
々れと志いひて者一人りかろり廿一日大嘗會下禊  
<sup>三條</sup>十一月廿日大嘗會<sup>近江</sup>此所かくてのり善女青  
永二年正月二日前會以下左七如く三日八条殿の洋  
禮あり今節より俄小降りありり應司殿此例といふ

建禮門院六原河津泉女に下しらせりて此處より  
此事ありり次は左中將清隆朝臣公九人内大臣宗盛  
平大納言時志按察使頼盛平中納言教盛新中納言知盛  
脩理大夫範盛三位侍從清宗三位中將重むらゝ朝  
三位中將惟盛殿上人十三人政藏人右大弁親宗朝臣  
右中將隆房朝臣右中將資盛朝臣薩摩守忠度朝臣  
但馬守經政朝臣右中將清隆朝臣勘解由次官親國左  
馬頭行盛八条殿北下市にての右禮由八出せりその左  
衛門侍中朝たりけり皇后宮母后に准玉ひり礼と  
拜礼かろりり八条殿の拜礼してて替りて

二条北太宮にも上西門院母后には進化共拜礼あり  
り—このを東國北に乱天下降をす世既三皇極  
其世に入舞しやと其宰相入及成頼は中しけり  
の也世を遁化佛化山に終る人も折あり—に  
つけてはかく此世も中しけりうら—ん人—畏をせり  
二月二日當今始て朝拜此のめに院山氣蓮花王院の  
此處の山氣蓮花の鳥羽院六也して朝觀の幸ありて  
例也正月忌月を化々此月と及び建礼門院夜拜  
ありと廟の中納言中納言中納言たりける女院此の座  
上敷—たりて中納言時忠公二のめて中納言知盛を

之て敷言されに多る三月廿五日官兵今口門出すし次  
以來四月十七日わかむに幾向して木曾義仲追舟の  
たの也廿六日宗盛公従一位執事廿七日内大臣を辭—  
中しけりも山拜—か—唯重任にて送む—の也八条  
言倉の亭もて此事ありて中納言時忠按察使大納  
言頼盛は新中納言知盛は三位中將重衡は右大臣  
親忠は左大臣は右大臣の余の人云—さりける

清水冠者人質として鎌倉に赴く事

去はより兵衛佐と木曾冠者と不和の事有て木曾を討  
んとす其故は兵衛佐は先返の祈ふれ—とを相模國鎌倉

小任、伯父十部藏人新家の太政入彦の康島訪と名  
そ東玉に、何り、何りけるか大倉の太郎うさ、い、い、い、  
すうけたりけるお増、お吉、田中、處にせ、吾たりける處、一  
而、おん、近隣、此、在家、を、追、捕、し、夜、討、強、盜、と、  
て、世、を、す、ま、く、り、或、時、新、家、兵、衛、佐、の、り、と、い、い、出、し、  
る、り、と、新、家、の、代、官、と、し、て、兵、衛、佐、を、書、供、し、む、り、事、十  
一、度、也、此、度、は、勝、て、三、度、は、負、也、子、息、を、始、と、し、て、家  
子、郎、お、も、多、く、討、た、り、れ、也、之、效、死、か、も、り、る、か、  
團、一、と、お、の、け、て、お、礼、の、孝、忠、の、女、ん、と、此、事、業、た、り、け、る  
新、家、佐、の、え、り、り、剛、迅、の、何、り、生、状、お、日、本、を、討、者、信

濃上野、兩國、此、地、を、り、て、北、陸、乃、七、ヶ、を、お、ま、り、て、既、小  
九、ヶ、國、の、主、に、あ、り、て、り、也、賴、朝、の、僅、六、ヶ、を、北、に、從、(て、り、  
此、地、も、い、ま、の、を、こ、う、ん、と、い、ふ、を、お、ま、り、の、所、院、内、の、  
當、時、賴、朝、の、支配、に、て、玉、座、を、新、家、と、し、て、云、作、を、り、  
業、り、の、つ、と、有、り、れ、新、家、兵、衛、佐、を、頼、ん、て、世、何、の、  
人、事、何、の、り、り、木、曾、を、頼、ん、と、し、て、千、騎、此、地、を、信  
濃、に、越、り、新、家、佐、を、す、て、十、部、藏、人、の、り、ん、事、小  
つ、て、お、ま、り、の、頼、朝、を、責、ん、と、し、て、お、ま、り、の、り、ん、事、小  
礼、お、ま、り、に、急、き、木、曾、を、討、ん、と、し、て、お、ま、り、の、り、ん、事、小  
甲斐、源、氏、武、田、五、郎、信、光、兵、衛、佐、に、お、ま、り、の、り、ん、事、小、信、濃、此

木曾次郎が去年六月、越後城四部長茂を去る  
して、余北方北陸を安んずるを、越後守に如く  
番悪の心を、いかにして、小室を責むるに、如く、  
計を、いんと、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
と、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
此十八、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
を、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
意、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
十部、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
徳倉、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

け、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
中、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
を、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
礼、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
事、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
十、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
る、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
檢、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
士、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、  
之、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、



高橋佐武田五郎を先小三て武藏上野をお通り白井  
阪小至りけ孔とハケ四七城の共我おもととと池重  
ありて十万余騎の成りたり志方の玉比佐樟川のを  
た陣をとる木守義仲此事を聞て軍を振かの多か  
によろろす大將軍九真加の有るふたよりく  
城四郎長茂ハ十万余騎とゆへしとも義仲二万余  
騎のそけちろくたは礼を無別佐十万余騎とゆへしれ  
ともその事よりゆへし但當時無別佐と義仲  
中たのいしちと雷家の悦をゆへしといとく都の人  
雷家と皆一門此人といひ合てるふたよりくたてサ

余年をの保ちつ仁源氏を親を討子を殺し同士討  
斃ん程又雷家此世よ山をあらんと云るれハ  
當時無別佐にゆへし及すとして引返り志方  
此といはるる又ゆへしゆへし人於馬山を望めし城て  
越後を所攻りにたり木守是より無別佐のゆへし  
文をきすそ状は日取ハ源氏の嫡子ハ未だれハ大  
將軍とゆへしなり義仲ハ次男の未だれハ未だれハ  
家を責んといひ志方く然るを今何故ゆへし義仲  
を責りのゆへしとゆへし無別佐此文をみてたは志方  
ゆへしとして進みゆへし木守重て状をつゆへし頭には八幡大

井照見了らせり内りと總倉友代友と存  
 家に義仲追討たり存外は此れ也内りつけ外り  
 ば寸虚言をやりあるハ佛神の冥罰を義仲に炭へ  
しと詳書礼たり此文に無謝佐おと初紀て返事と  
 世十天竺友内遠宗と岡崎四郎義宣二人使者として  
 佐宣ひらら木曾次部に向ひていらん十石餘なりか  
 平家内りと遠和此族也外にはお傳の歎也爲るを  
 今頼朝の礼をの追討のりと兼院宣の茶生渥の  
 天恩に仰らす也且ハ君を敬たり且家をこいひるハり  
 たの有合力の無一族此位を忘りて平家と致内に  
 比り淺兼る實否を兼るたの小是すを兼向する事  
 也十郎藏人を是一区一とわとわける一とうらんとと  
 京邊に子息清水太郎義守を頼朝小た一區一て免れ  
 人と頼朝人頼朝の成人の子を持り給はり今も也か礼  
 をり是をり子印をやりされり也一押寄て勝負を交  
 ず一と性小云一一おりてまけていらるいは性記  
 けと性宣て足三新三郎清理と云雜笑をさ一一副て  
 遣らる此事中人とを向ふ家に犀川此も増  
 りてる邊る此事中んて川に浮橋を渡りて  
 二人ハ使をせりす天竺友内遠宗向ひておりても兼り

かゝるも落すす無形依の祠の上に己の祠をくまへて志  
たかふ世云いりける本堂を是を削て根井小室此者より  
を言集て我心にて家身の上の事と斗りりたし是  
ものららんと云はれを御共<sup>共</sup>一同にやらる日本國ハ  
亦余れとやを僅小廿余をを源氏ハ折取らせ  
りてり今四十余を當時亦家比やにての打上られ  
たる者ともて徳人倉屋と申中遠おせぬいてハ安家の  
収めてる世いすすめ藏人及取らうと云はれ  
うらへた清水此書子をうけらる後つはく衆らさ  
せしと申すは本堂のめたと子今井四郎進出でや

るに思ひらる事こそいとも若くはやくせぬ今この  
のから矢取の器と後日を留する事とちまりのを遠  
とていハ小中よかすとも是ハすそ胡先生及をハ  
忌原太友の討衆つせておしおせハ親の歎とせぬ  
ひあんと定る湯倉及も此をあらん何れハ一軍ハ  
くすすらんものなはし一軍事此つあそハ山真加の程を  
川流せよといひり礼ハ本堂是を削て今井ハ  
めたとの子也根井小室今希ぬれと子いん事ハの  
死て是ホウ云事ハを申ハ定る恨あんと是らにすそら  
化ておしりあんとは使をたせとれす礼ハ天師友

内孝系同治の節義宣と申し礼が崩れる者共也長治の  
節三浦の父子東國にいかと申す天竺友の内  
徳倉友の兄も者也上り老共にて仰りて是とて出  
向徳入て木當に引つゝ後い對面す木當中りり  
以使者の由て申す十部藏人友の徳倉友の由に  
義仲為りて伯父にておすり人のおれておられり  
すけかたのりり申す其憐れりの程に唯何  
の北のそを礼をいす申すぬらとの作の存の外  
の親のいとをいす申す糸をいす共出りて申す  
中の徳倉の親老の子もいす何れも作の従ひて申す

厚く義仲の希りて高直宮仕比とく小呂のれい一義仲  
一方のむひの共内代友とていす申す申す申す  
として年十一歳小呂の清の親老をいすて已に子供  
とていす共始に申すけいの子をいす身をいす  
共徳倉友の子と申す申す申す申す申す申す  
りいて徳倉友をいす申す申す申す申す申す  
たうれんすりと申す申す申す申す申す申す  
三志を子供を申す申す申す申す申す申す  
とて申す申す申す申す申す申す申す申す  
早報申す申す申す申す申す申す申す申す

らハ親子の縁ヲ遠ク海一氣小舟アリ一尺也整十を  
んて酒宴友の命をりたるつらんと宴ひれ  
礼ハ遠方出常司流石十歳此人をれとく返一り  
くならす父の意と事とに兼ぬと斗宴ひて母や  
免りとも古一別て宴ひるら冠者をら鎌倉殿の  
子にせんと宴一はとて老いれ也再見糸糸世又  
見一糸とせらふもりかいくら一控のしくらうまう  
友と父出旅とハ志一くおと一中一いと兼りし  
せらかりたる出幸りいもひと父出旅を計衆ら  
せんとも出られて也去程ハ情あま人をあえ一

ま一いと兼り一のゆせらり一にらはるわいんひと父出  
旅を計衆らせんと出つられて也去程ハ情あま人を  
あえ一とせらるすのよハのいん命をさくらくとれ  
ら化んすのせと父出旅り作れは定初<sup>初</sup>の別れそ  
んすのよせ目いあま命存る丘返らん程のよみ  
せさ一多くとそ三掛七の計を母ののよにみせられ  
母りけり是りふをせにや何らんて返を押へて  
みるいから社家一とれを後本重二人此使る場  
すめて種一は引出物の上不信濃馬一足てじれ片  
んゆき中たれとそ清方一射者をとせし二人の山使

その書司を受取ても攻りし後其冠者に高し  
ひきの侍少人なるあやの太郎次郎河原次郎重氏と  
いけり者をそ言たりしは清久冠者の原重の歎き  
花びつようくは渡らせたりと知れ共弓矢の家  
生れぬらたは公取者をすいふと中りは義隆  
かくせといけり

もやまのりは此草葉やかたぬらん作られたる  
といたりけりと重氏

と心に道は清久のよかれは海の方の常にと  
武田太郎信光本名を阿比多て兵衛佐に終言し  
意越と彼清久冠者を信光解つ人とならるを  
あいのそ返事とわらわ同源氏としてかくいふ  
娘持たしを衆らせよ清久冠者につらせんといふ  
地あかり信光是を聞て守らるあひていふ  
して木を失ふんとあひて兵衛佐清久を  
と後しを聞たり兵衛佐木常返を聞て本  
意も元より清久の礼として清久冠者をお  
果して徳倉一政り義仲と本名に改りて  
り若三政余人の妻共を以集て中りは各々夫共  
此身の代に清久冠者をきしつる也いふといふ冠者

をきさぬものからと徳倉友成にて軍のふり一軍  
項の義仲の耻をおりへと引りし人との夫  
とて死すしとされと世の中を静めんとて  
清の冠者嫡子お化共引をあらして中つらと定  
いて武起心お化共流されたる三千余人お女  
席を是を聞て向か厚家の山事やヶ権小言お化に  
る王をお殺すしとて妻子共ら悲しと化はとて何  
國に浦より来るしと夫共を向いふは  
てり月日の下に十日と社にお化を通くと答記  
を書てふたりはら夫共は是をふていふを合せて

後々利

### 平家北軍兵殺向此事

四月十七日木常義仲を追討したため兵を北國へ發  
向して次に東國へ責入て兵部佐頼朝を追討す  
れより一團より大將軍の權亮三位中將惟盛御  
越前三位通盛令薩守志度朝臣三河守知盛朝臣但  
馬守經正朝臣比路守清房朝臣讚岐守惟時朝臣刑  
部大夫廣盛侍大將軍の越中前司盛俊日子息越中  
判官盛經川次郎兵衛盛次上総守忠清同息兵部  
忠光同七郎重隆章清飛騨守章家同子息大夫判官

章高上総判官忠經河内判官季國高橋判官長  
綱武藏三浦左門尉有玉以下受領檢非違使教頭尉  
無別尉有官<sup>北條</sup>二百五十人六略教を以てす其外畿  
内山城大和摂津河内和泉紀伊國の兵共去年の冬  
比より催し集むにたり東海道一と遠江國東北  
者共六ヶ所を以てし伊賀伊勢美の尾張三河の者  
共社の系りより東山尾に近江美濃飛騨三ヶ國七  
兵より以て系りける北陸道と若狭以北北者共惣三人り  
系らす山陽道と丹後但馬因幡伯耆出雲石見山陽  
山陰南海西海道四國北者も系らすりなり播磨美作

備前備中安藝周防長門豊前筑前筑後大隅薩摩  
此國北人より去己冬より二百のり明子と馬の等  
のひまはて合戦ありと内後つり多礼も春過ぎ  
かありて世おさる其勢十万余諸大將軍六人宗徒の  
士廿余人先陣後陣を定る事ありと云ひし我々  
比より進みたり此勢にも何の面も世々庵くいとわき  
こゝろんとせむし片及を以て礼の政改ふ事たり若  
くは権門勢家をいへば正税支物といへす所及びより  
てうといふたれと狼籍斜あらず大演唐造の三浦山田  
矢揚真野高島比良の藤塩津海浦小至りて次あり



追搦す人民山野に逃隠る義仲此事を聞て我身も  
信濃小倉にありし官泉寺長吏宗明威儀師を大将と  
て稀世新衣赤衣大林木樵井上は幡を尻川上石黒宮崎  
佐美の二黨落合中郎兼川中を始として九千余騎にて  
越前国火打城を攻めしる火打城よりより究竟の城  
を北と南と荒地中山近江比湖水北乃をく臨津  
海は浅き濱小橋た北は海は杜ノ尾山木也戸倉と一  
也東ハ院山の方と越の白浪小橋地より西ハ能登越  
海山廣くお廻りて来地はゆるにみは流り磐石を峙て山  
高く立上て四方山子を連たりハ北陸道中一ハ城廓

也山を流しし山を赤に河の兩岸此間城廓也赤  
東より西ハ大なる山河流出たり大なる巖を重積て  
柵にわたる水をせり留たりゆふく赤なる此谷をよ  
はく南北に居あひた、く水の面遙小み渡して  
水海れし、つち山を浸く青くして混濁たり  
浪西口を沈ておし、張浦たりかをハれと舟か  
くしてハ輒くより十た板もあ、のけり

平家此軍兵火打城を責落し事

七月廿七日官家此軍兵火打城小責落たり城の有板  
いよして落す處、ともみはけりハ十万余騎の

勢向山と名けてはつら小口を送る程小原氏の大  
將軍齊明威後師平家此勢十万余騎に及り叶ハ  
十と名ふは是も思に要する心ありて我城を責はせ  
らる或時城の内か平家此方一箭射掛たり  
怪とおのひて取らみれ中不詰たる文有氣を取て  
みれ城の内よりすくまやうを書たりらる此川のそい  
に兵斗りて河のもたれ大ある椎の本より彼木のそ  
り洲のりをせり洲と云其洲を渡りて東に流し細  
と云る谷也谷のやうに二三斗山けと道二つに分れ  
たりそらるる石と後通たり此道を城の後一押寄て

軍代時を他り多時の者を剛なるを城小火を掛り  
一と名ら北一はみあらん十其時大子を出し河  
とせて中に取あてたり又河山川をせれたりけて  
はつ河尻足腰を巡して志名みを切あら水ハ  
程なくあら一齊明一黨五十余人城の後へあら  
庵一若敷としてる後北は河やまらしめる  
はて中事糸りし一と外殿につれて志こ  
より多れは越中次師兵衛あつとせ書たりける平  
家の軍兵見をみて是はたはつてふひくやん  
とありいけれと事たてはせと有るんと云ひは

能兵五万余騎を擧てきくなり 船に書にかりふれ  
せて河に下せしむ河端に推の木あり漸河に打入て  
渡せばは澄のけありゆれさりなり 打越てふれ谷の  
り道有毒ふ成るをけハ業のこく城に後(指せ  
る又おしへれこく志るみを切落し花ハ散る  
ふたらありも危り此法をノ矢をこくい経いこく  
城を待候て声を聞て時を化ちて城の内か  
火を出し是をふて敵既ハ打入ハ火を越たりとて  
城北内に驚りたる者共のをもてけられたる家おとし  
と城戸を開けしつと後といはるる者家大自(押寄

て中に取込て戦ひ花江源氏の兵數を去らす討  
化にり奇明候て平家北方に居かりてハ陸道ハ  
業内者京明に任せありとせ中(源氏ハ軍兵  
火打城を遠慮されて加賀國(引退ありの橋をいれ  
て支たり平家の先陣越中(司盛俊五千余騎は  
安言の漆(打入て了せやくと下知く(家おとし  
と渡りり加賀此國乃任人(置橋ハ太郎越中の  
任人(宮清太郎二人池上りて一人(りすを河小巻  
射をあり者共として河中(高ありりて戦り置橋  
ハ太郎(越中乃任人(宮清太郎二人池上りて一人(りり

たすか河に射ためと者共とて河中に落しうて  
り富樫太郎越中此が司盛後放り矢に首に  
骨を射し流れて河中に真倒に落しり富樫太郎  
と内由を射し流れて河中に落たり  
を御守に人よりて肩に掛て寺川端に置たれ  
と川に目守御たりけれ御共今ハカ及ハハ  
敬院に近仕の人にとり衆らせし由より首首をり  
て本玉に取して女房にみせ衆らせんといひれ  
一川の者共衆人集りていつてつく同北御く程  
此人の首を掻へた衆今ハ生て何れせん死ん  
て防矢りする地をたよひて由はてあをたか  
せて先に三て一門は者も兵衆人防矢射て異れ  
平家大将中とてしらす事少くなく越中國に  
越し富宮流の意氣にかけ入て地をそ業師をつけ  
て醫療する程は療治に叶してサトトソに療  
あのかくはく首首をりさりきる

木曾北越加賀の國を追放し事

太程し平家の越中が司盛後二黨五平余流そ  
かかを池過る處に富樫太郎宗親林太郎光明一  
城に落る件の城搦ちありは伊田北河邊に落大井

去けくして山巖石也上のたんに矢を箕のちりめ  
振らうれて下夕子とを處もかくるを張て何万騎  
此勢おせし来らとも一騎も遁る處のさる構へお家  
の侍越中お司盛俊飛弾判官景高六千余騎にて  
押寄せたれとも大うい落へた槍もかろりり城此内と  
志れりに招くいりしておすくんと機守もあふたふ  
入て奇明威儀師を謀りて翌にいうる放りる牛共  
を各集め以書に火を焼して牛の角に結いつけ  
て五十余騎城戸の上の坂むけて追上たり後とも  
とつと時を計りけりけり牛の陣の上へ走りむる

敵既小夜時お奇なりとんはて急き石弓を切て放  
ちたれりり城おかしくはたわらへた出らぬわいし  
牛共既の火の初めさといひるうおお勢もあつて走  
ら或ハ城小向いて角をういおけて走り入或ハ原田に  
着ひたりておたおたおり又お殺さるもゆり牛の  
為にお家多祥たれ初むくやくやくにお家入籠く責  
たれハ林高横勢くおお殺む礼も力も及も追  
たれハ江より昔お家燕西國の軍ありけり田平と  
云者奇の將軍もそ有るお家國ハおをけんとする  
田平も十余既の牛をゆうけて赤衣をまて就の

文をうたぬを牛の角にひつけて葦を束ねて尾  
に鉄舟を油を濯て火を舟で城の内より燕の軍の  
中へ追入つ、早急の剛の者九千人牛の攻つて所を  
牛尾の火燃せり、燕の兵是をみよ、就て文を  
お怒くけあら、牛共の尾の火の向つて、城すして  
軍の中に走り、さこく程、當る人、皆角の紐、切つ  
つれて死多り、城中、報をお撞を、おのき、言声  
て地を言、ける燕の兵、大小、敗て、奔國、勝り、奇  
明、其事を、おこ、て、お身、比、謀の程を、破  
け、社、や、い、れ、れ

木曾義仲出陣并神願の事

林六郎光明城を、追、落、し、て、山、上、毫、下、を、有、り、ら  
う、早、馬、を、立、て、木、曾、に、此、由、を、告、た、り、れ、是、を、受、て  
木、曾、大、王、致、謝、ひ、て、お、立、ら、る、處、に、清、和、冠、者、北、才、四、人  
有、刀、持、と、し、十、歳、西、河、王、と、し、八、歳、余、名、王、と、し、三、女  
又、當、時、の、女、子、の、り、十、と、八、つ、と、を、お、よ、せ、て、信、ひ、り、ら、ら  
己、亦、ハ、十、ヤ、み、お、た、し、及、ひ、な、ハ、弓、の、毒、を、い、う、し、せ、て、お、怒  
此、の、事、の、知、れ、し、む、を、法、を、お、封、者、を、お、海、原  
取、へ、お、化、れ、し、一、お、化、ハ、一、お、化、ら、る、を、お、お、お、お、の、ち、い、れ  
世、を、名、ら、ら、し、お、の、り、己、の、為、也、北、陸、道、を、攻、り、ハ、二、月

三月に々よの過し以て京へり登るハ一二の何ん  
すらし其程此の化くかて何化よ常に其精をく  
て八幡の糸りて祈をせよんり慰ふかといひて五万  
清引平くして登る是の宮坊にて有るより後上り其  
人より出して悲みれ木や既の國山を越て砥波山  
へ向ひる合戦の祈禱しと願書を書て白山へ  
彼願書曰

立申大願事

之糸つれ馬長

- 一可奉勤仕加賀馬場白山本宮世講事
- 一可奉勤仕越前馬場平泉寺世講事

一可奉勤仕美濃馬場長瀧寺世講事  
右白山妙理權現者觀音菩薩埜之岳跡自在吉祥  
之化現也三州高嶺之巖窟利四海寧土人尊早  
參詣合掌葦滿二世之悉地歸依体顯類誇  
一生之榮耀惣鎮護國家永之宝社天下無  
之靈神者歟而自今年来平家登不當之高  
位飽誇非巡之榮爵柔茂如十善万衆之聖  
主恣陵辱三后九棘之臣下或追捕太上法  
皇之御或押取博陸殿下之身或抄回親  
王之仙居或奪取諸宮之權勢且幾七道

何處不愁之百官萬民誰人不歎之已欲斷  
八宗之惠命盡圍城三井城之法永滅智證  
一川之深學侶其逆勝調達其遇越波旬月支  
大夫之再誕欵日城守屋重來欵已磨滅  
佛像經卷忽燒拂堂塔僧坊寧非法家怨  
歎哉是乎次源平兩家自昔至干今如牛角  
天子左右之守護朝家前後之將軍也而  
觸事決雌雄伺隙致鋒楯仍代之企合戰  
度詳勝負已有宿世之怨忌是非私之大  
歎領是弟因茲恭蒙神明道之冥助為降

伏佛法王法之怨歎三大願於三州馬場仰  
感應於三取權現就中先代伏王歎皆由  
佛神異負此時降謀叛輩寧無權現之  
勝利哉加賀白山本地觀音大士者於持畏  
急難之中能施無畏雖平家等兵如雲集  
如霞下衆怨悉退散之金言有憑縱雖  
謀臣凶徒加兇咀致怨念還著於本人之誓  
約無疑然者還念權現本誓感應不可迴  
踵何況我家自先祖仰八幡大菩薩之加  
護振威施德而八幡本地者觀音本師阿



彌陀也白山御體彌陀殿士觀世音也師弟  
合力者感應潛通者歟况彌陀有無量壽  
之号豈不授千秋萬歲之筭哉觀音現藥  
師王之身寧不食不老不死之藥乎本地  
云岳跡勝利揭焉也什公什私欲遂素懷  
處志元與私奉公在頂偏為降王敵為  
守天下忍為與佛法為仰神明俾開天  
神無怒

但嫌不善地祇與崇唯厭過失所以平家  
奪王位是不善之至歟謀臣滅佛法亦過  
患之甚也日月未墮地星宿懸天神明為  
神明者此時施驗三寶為三寶者此時振驗  
威然則權現照我等之懇誠宜令四討平  
家之強我等蒙權現加力願欲討謀叛之  
輩若剛丹祈感應速通者上件大願無  
解怠可果遂也而者彌施源氏面目新漆  
社檀之莊嚴領誇神道之真加倍致佛法  
之興隆矣仍所三中如件敬白

壽永三年四月日 源義仲敬白

砥波山合戦平家敗北之事

廿月廿日林六郎光明并富樫太郎の城廓二ヶ處を破  
られて次第に責入りし官兵團より早馬を以て中札  
比都つと嘉吉より平家へ山北一場を引て其勢り  
りち上平家十万余騎の兵を二日分を三  
万余騎を志の山にせけて差遣し七万余騎を大  
子へむけて越中前司盛俊一黨五千余騎引きて  
加賀を打過て終夜砥波山を越て中黒坂の嶺、  
馬場と批たり木曾是を用て五万余騎を相具し  
て越中の國へ池越て池原の般若原と批たり

越中乃國の住人木曾少つ比中より宮崎太郎と宇高  
比漆の軍の内書を以せて其後あつても其を以て  
たふかたて越中の兵へ知して宮崎少つ比に廿日  
と云ふ疾愈ゆつたあふ鑑着て木曾夜へ参りたり  
其礼と申すて是を感しあひ可矢とる身を哀  
れちとるりかた命を的にうけて大事の身を原  
ひ既死しりる人のよみより又澄たてし終り  
と云ふいとおしり今度の軍は夜原を以て義仲と  
小堀也平家の大勢と南の面を以て敵を打ん  
たり此山の案内者も夜原にてあつたり今

度の軍にかけせうたせしと、**友京**に申ひせと、**宣**  
急と宮崎中野と誠小山の所んかといつて知らて  
ひら此磁ふみ山に三つの道也、**北**黒城中、**南**取南  
取とて三つのお家の先陣は**中**黒取乃、**横**馬場、  
向ては**後**陣は**大**野、**今**漆井家、**津**幡、**竹**橋、**杯**、  
為しは也、**中**北山とすいては也、**南**黒  
取、**濃**搦手、**楠**六郎親忠、**千**騎、**北**境にてさし、**南**、  
りて**熊**島、**出**こたりて**彌**勤山、**折**合せよ、**北**黒  
取の**大**將と**新**徳と云、**美**女、**千**騎の勢にて**宇**樂寺  
を越つて**彌**勤山、**押**合せよ、**三**百、**一**子、**成**て時を

他ありと搦手の時より、**南**へ、**平**家、**後**陣の勢を  
續いて**龍**谷と云いて、**後**へ、**不**か、**あ**ら、**龍**谷のいさ、**あ**ら  
らんと、**二**つ、**原**氏の搦手、**不**か、**あ**ら、**龍**谷のいさ、**あ**ら  
か、**あ**ら、**時**を合せ、**あ**ら、**龍**谷のいさ、**あ**ら、  
す、**あ**ら、**其**時、**搦**手の**不**か、**あ**ら、**龍**谷のいさ、**あ**ら、  
て、**押**合せよ、**押**合せよ、**あ**ら、**龍**谷のいさ、**あ**ら、  
と、**搦**手、**有**迹、**あ**ら、**南**の**大**谷、**あ**ら、  
と、**あ**ら、**夫**、**一**つ、**村**、**あ**ら、**宇**、**あ**ら、  
と、**あ**ら、**是**を、**南**へ、**面**、**あ**ら、**矢**、**取**、**の**、**勢**、  
あ、**あ**ら、**平**家、**向**、**南**、**の**、**勢**、**あ**ら、**あ**ら、**あ**ら、**あ**ら、

後京として官治り申しにつれて搦手を廻りける楠六  
郎親志千騎の勢にて南黒坂をお廻りけるを廻  
りて是も彌勒山を登りける鞠繪も千騎の勢にて  
山黒坂をお廻り安樂寺を越て彌勒山を差合  
する去程に木曾坂の搦手を廻りて後京を宮の  
けり平家の大い既上砥波山をお越して黒坂柳系  
一井出と申しゆ種と大堀也柳系の廣く歩出た  
るりのをゆるい池邊農舎にて有る一池合の合戦  
と地の多かたより車多化大堀の加さよけられ  
悪敷るまなびんすも敬を山に承めて口をすじ

て後より加うる谷の巖石にむけて追落んと思ふ也其  
後ゆる義仲を先急よて黒坂口に陣を取一  
款既上向いたりと云い此山四方巖石也堂左右款  
小宮せ一い馬の足を休めんとて山小下居たり  
他宮家此先陣山を越(あ)として舞(ま)りま  
強き馬小糸の勢で砥波山の東の麓ある大宮林の  
高木の末に白旗一流流けたり業の如くや宮  
是をみてのちや源氏此先陣向いたりとて敵は業内  
者也若く不業内也左右かく廣み(お)出で四方の池(い)ら  
化てら(あ)かりん此山で市巖石也敬堂左右を

つよみし馬の草のい水の夜共に能く也山をかき  
て馬の啼も弱りたるまにありたりて休のちやとて  
砥波山トリ居つ、様馬場に陣を取束を及  
と平家山を越え先小して強き馬をおれえり  
取棄て十三騎をのちをとおとせつ所をせつたて  
砥波山の東に禁に池をぬ四方をまつとふ廻す  
一村の表より交山の縁の本のるより朱の玉垣の  
ふして片堂に祀りの社あり前と鳥居とふふり  
里の長を尋て何れと信の言とやといふる神を崇  
めたりいふとと信ひぬといふは垣生の社とやて八幡

大井をいといふちの當山の新八幡とやといひ  
久しハ本を先喜ひ思ていふと大夫房光明といふ者  
有らるを明ていふと義仲孝小當山の新八幡宮の  
山室前に近付かりて合戦を遂んとす今度の軍  
いと疑ふく勝ぬといふ小つせとれにきていふ且後代の  
為且當時の祈禱に願書を一筆書て進もや  
といふとや切の(きといふれれ尤の然いんといひ  
服の中より小規をとり出しと帖紙を押し移けて書  
光明其日褐衣の襟直岳に首下頭巾着てあとの  
後目の襟に黒紙の矢負て赤羽にり太刀が寸長

ありに塗すの友の弓股（字）に授て本るゝ前々膝中り  
さて去たりと存れ文武の達者歟と云へたりけり其の  
略曰

帝命頂禮八幡大菩薩者日域朝庭之本主聖  
明君之叢祖也為護室祚為利衆生改三身之金  
容靡三處權扉爰頂年之間平相國（字）者總管  
領四海而令惱亂万民是既佛法警皇法歟  
也義仲苟生弓馬家僅繼箕箒（字）見彼暴  
惡不能觀忌慮任運於天道投身於國家試義  
兵欲退出畧而國戡能合兩箇陣士卒未

得一鼓鬪之間遙心忙氣合於一陣揚旌於  
戰場忽拜三所和光社檀機感之緒熟既明  
也凶徒誅戮矣疑歡喜降淚渴仰銘肝孰  
中當祖父前陸奥守義家朝臣寄附身  
於宗廟之祠族号谷於八幡太郎以降為其  
川業者莫不歸敬義仲為其後流頌首年  
久興今此大切緞以嬰兒量巨海蟻螂取芥  
如向三車然而為君為國興之志至神鑿在  
時持哉悅哉伏願冥顯加威靈神合力爰  
勝於一時退雖於四方然則丹祈叶冥慮顯

右加護先令見一端結敬白

壽永二年六月二日 源義仲敬白

と誓ふたりはる此願書と十三表夫を扱て雨の際多  
に兼笠をさる胃の兼比下に隠しりて忍やふ  
大威此社檀(送り)なり持式八幡大井其二かた志  
を望むらん天照天より飛来て白旗のふかぬんすん  
寸義仲馬より十彦化れて甲をぬき首を地にて  
是を拜し一なる手家此軍兵の途小を遠えし  
身の毛をそそえつる去程より本を勢三千余騎より  
池来る故に得此の事を見てはあんとて本水柳系

本水柳系に引こすとかり有りては三千余騎とす  
有ては一万余騎三千余騎此勢を四度十度に世もせ  
け小なる皆柳系より引こす本家碓波山の口より  
くしけのぬもした本山を後しりて北面に陣を本  
さる黒坂の北の藤小松長柳系を流しりて南向小  
陣を取雨降此間僅小六段隔て各楯をつたひ  
たり本當と勢を待ひてり合戦を急らす本家此  
方より進す時の声三々度合せて後と志つたりと  
りてみへる勢くわらいて源氏の陣の方より精兵  
十五騎を楯の表に進すて十五の楯を回音に本家

乃陣へ射入る平家より槍十五挺出しく金も十五  
此端を射近きす両方十五挺で前へ揃の表つすも  
出て互に勝負を交せんし申りけしはよりの制  
して中務入川又とを有て三十挺を出せし  
三十挺を出しし射近す又三十挺をを後へ三十挺  
出は百挺を出せし百挺をを今そ矢を射て  
返してたる申すを双方勝負小の陣より引退  
くかす事辰刻より己の時迄六分費に及り平  
家と源氏の如くあての辺を待て日を暮らんし  
十日謀と志すすし得いけいけ言ひて日をさし

信社をうかけ北去程小の陣より成花の今井  
四郎兼平揃六郎親忠八島四郎茂全前を先と  
して一万余挺の境にて平家の陣の後志の山のより  
出は後しし時をとつと化りみけたりは礼と黒坂  
口柳糸の扱たる大の三万余挺同時小時を化り前  
後四万余挺の如く声谷を言ひし嵐上言ておひ  
はし平家の北の巖石也夜すはよりの化しし夜明  
てを河んと油取ししけし所小時を化りけたり  
は礼と東西を失いて所を陰く後山深くしして  
陰より礼の揃の如く思ししとよりありつる者



をいふせん十有六の大なるは、此進す後一引  
近す鳥の河の終は天より此降す口は既と當ぬ  
業内と志す力及ぬ即ち此心向くは南谷一  
むけてを落しけり此ありは巖石を雲の衣ふ衣  
先と後と一岩間杖貫化岩にうけて死にり  
前に落すもの、後と落す者ふり死後に落す者  
今落す者ふり不敷る父落せし不し落す子落せし  
父を續く三落せし部より落す馬に人入る  
馬の上より落せりて、今より谷を中家の大塊を  
池埋てより谷の底には大なる柳あり一枝は十丈

有る隠し程不埋にけり此巖母所ん此大將  
軍三河守知度以下侍と飛彈判官景高源府諸  
司有官此輩百六人宗徒者共二千八百加り此谷  
にて矢より巖泉血を流し死骸陸をふせり此  
より谷に此巖の孔刀痕木をこし此跡り枯骨  
谷にみちて今此世にありと此巖の骨出る  
ヶ根に中家此大塊を打落しけり此ら建城の  
向より杖つれて相たり此小中家の池を埋たる  
谷の中より係し火燃えて上る此大に降して命  
木をましくてみす此小中家の石の石室後にて此

いさる令叙の宮とヤハ白山の叙の宮の事也本堂馬  
よりトリ雷をぬけて三度拜し中りて此軍の義仲  
ハカノ及ふ處にありし白山権現の山をさへひにて  
平家の魂のさへひよりとりとて叙の宮ハ何かにありて  
渡りせりやん山悦とさんとて鞍置馬廿足と傳  
説いてありけ白山の方へ追き足程の神陰をい  
てうきて五ノ北とて加賀小村六部光明ヶ處に横た  
るを白山権現の家進し中り今ハ不遠神伝を  
傳りにるものとや

平家物語十三卷終

